

1 工

(2) 地球最初の生命体が、海のなかに三十三億年間いた(こと)。(23字)

(1) 別解 生きものは上陸するまで三十三億年も海のなかにいた(こと)。(24字)

(3) ウ

(4) 1 生命論的世界観

(5) 2 別解 生きものは多様になることが大切で、継続性を重視する(25字)

イ

1 前後の内容を確認し、文章の展開をつかむ。

「の前後の内容を確認し、文章の展開をつかむ。」

「の前後の内容を確認し、文章の展開をつかむ。」

「の前後の内容を確認し、文章の展開をつかむ。」

「の前後の内容を確認し、文章の展開をつかむ。」

「の前後の内容を確認し、文章の展開をつかむ。」

(2) 指示語を含む一文や、前後の内容を確認する。

「当然のこと」と考える理由

「当然のこと」と考える理由

「当然のこと」と考える理由

「当然のこと」と考える理由

「当然のこと」と考える理由

2 例 家族のための銭が手に入ったうれしさ。(18字)

(1) 別解 銭を得て家族が喜ぶだろうという期待。(18字)

(2) 例 反物を織って得た銭を貧しい子弟のために使う年子を立派だと思

(3) ア

(4) ウ

(5) 例 あいが、簡単に銭を手に入れることで、銭の味を覚えて、もっと

銭を欲しがるといふようなさもしい性根になる(47字)

1 線①を含む一文と、その前後を確認する。

別解 心情的な変化の原因となる出来事

「別解 心情的な変化の原因となる出来事」

「別解 心情的な変化の原因となる出来事」

「別解 心情的な変化の原因となる出来事」

「別解 心情的な変化の原因となる出来事」

(2) 直前の母の言葉から、年子に対する思いを読み取る。「腹を空かせた子弟に食わせるために、年子さんは反物を売った銭を持ち出している」と述べた後で「滅多とできることじゃない」と感想を述べていることに着目する。苦

直後の一文の末尾が理由を示す「……から」であることに着目し、「これは当然のことだ」と考える理由を述べていることをつかむ。「海には……遮ってくれ」るから、どのようなことが当然だというのか」と考え、「これ」が直前の一文ではなく、段落冒頭の一文を指していることを捉える。

(3) 「生命体が海のなかに三十三億年間いた」ことが書ければよい。

(4) 与えられた設問文を読み、「生きものの研究を進めるうえで必要な考え方は何か」と考える。64～65行目に「生きものの研究が……調べていくには、土台となる生命論的世界観が必要なのです」とある。

(5) 与えられた設問文を読んでから文章に戻り、「機械と生きものの違い」について述べた52～63行目に着目する。「機械は……大事ですが、生きものは……大切です」「機械は……追い求めますが、生きものは……重視します」から解答をまとめる。

(1) 線③の二文と、前後の部分に着目する。

前の場面：あいが母に叱られている場面

夜風が忍んでくる

蛙の鳴き声が賑やか

後場面：一家が床に就いている場面

線③のように情景を描写することで、あいが母に叱られている「動」の場面から一家が床に就いた「静」の場面へと転換したことを示し、寝静まった一家の様子を印象づけている。

(2) ヨシの発言に着目して人物像を捉える。

「銭を受け取らないのは、……あたしらの……殊に、あいのためだ」

「あいはまだ十歳、簡単に銭が手に入る、と思わせたくなかったんだよ」

「銭についての母の教え(76～79行目)をあいの状況に重ね合わせ、あいを叱る母の言葉を、表面的にはなく真意まで理解している

(1) 線③の二文と、前後の部分に着目する。

前の場面：あいが母に叱られている場面

夜風が忍んでくる

蛙の鳴き声が賑やか

後場面：一家が床に就いている場面

線③のように情景を描写することで、あいが母に叱られている「動」の場面から一家が床に就いた「静」の場面へと転換したことを示し、寝静まった一家の様子を印象づけている。

(2) ヨシの発言に着目して人物像を捉える。

「銭を受け取らないのは、……あたしらの……殊に、あいのためだ」

「あいはまだ十歳、簡単に銭が手に入る、と思わせたくなかったんだよ」

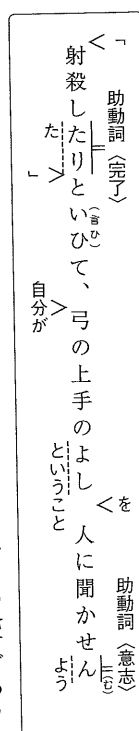
「銭についての母の教え(76～79行目)をあいの状況に重ね合わせ、あいを叱る母の言葉を、表面的にはなく真意まで理解している

(2) 直前の母の言葉から、年子に対する思いを読み取る。「腹を空かせた子弟に食わせるために、年子さんは反物を売った銭を持ち出している」と述べた後で「滅多とできることじゃない」と感想を述べていることに着目する。苦

- 3 (1) おもうよう (2) ア
- (3) 1 〇男の射た矢がそれで、わなをつないでいたつなを切ったから。(28字)
- 2 エ
- (4) ウ

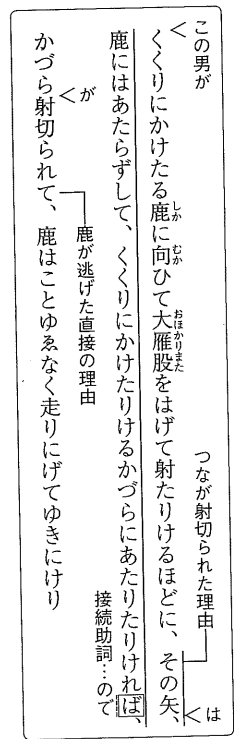
【解説】(1) 歴史的仮名遣いの原則に当てはめて現代仮名遣いに直す。「思ふ」は、語頭以外のハ行なので、「思」にする。「やう」：「ア段+う」は「才段の長音」となるので、「よう」。設問の条件に従い、全て平仮名に直す。

(2) 選択肢を読んでから、古文に戻って——線①とその前後の内容を捉える。



「……といひて(言ひて)」とあるので、「射殺したり」が男の発言であることをつかむ。また、「射殺したり」は完了の助動詞、「聞かせん」は意志の助動詞「む(ん)」で、「弓の上手のよし」の後に対象を表す助詞の「を」が省略されている。すると、全体の意味は「射殺した」と言つて、弓の名人だということの人を人に言いつらそう」になる。したがって、正解はア。前の部分とのつながりから考えても、アが最も自然な文脈となる。

(3) 1 ——線②と前後の部分を確認し、省略されている主語や助詞を補う。



- 4 (1) うなが (2) つの (3) ぎんみ (4) きよたく
- (5) 預 (6) 訪 (7) 往復 (8) 功績

【解説】漢字の読み書きは、送り仮名まで含めて出題されることもあるので、線が引かれている範囲を必ず確認してから解答する。

- 5 (1) イ (2) イ (3) 必然(故意)
- (4) ア (5) エ (6) ありました
- (7) ウ (8) エ

【解説】(1) アは「粉」(10画)、イは「閉」(11画)、ウは「茶」(9画)、エは「波」(8画)。したがって、楷書で書くときに最も総画数が多くなるものはイ。

(2) 「歓喜」は、非常に喜ぶこと」という意味。「歡ぶ」喜ぶ」という意味の似た漢字の組み合わせでできた熟語。ア：「匿」には「隠す」という意味があるので、「匿名」は「名前を隠すこと」という意味。下の漢字が上の漢字の目的や対象を表す構成となっている。イ：「豊富」は、豊か、富む」という意味の似た漢字の組み合わせでできた熟語。ウ：「出納」は、金品や物品を出し入れすること」という意味。「出る」「納める」という、反対の意味の漢字の組み合わせでできた熟語。エ：「雷鳴」は、「雷」が鳴る」という、上の漢字と下の漢字が主語・述語の関係となった熟語。したがって、「歓喜」と同じ構成になっている熟語はイ。

「鹿はこつゆゑなく走りにかけて」いった直接の理由は、直前にある「つなが射切られた」ことであるが、それだけでは指定字数に満たない。そこでさらに前にさかのぼって、つなが射切られた理由を加える。

【読み下し】男の射た矢がわなをつないでいたつなを切った」ことが書ければよい。

【例】鹿がかかったわなについていたつなに、矢が当たったから。(誰が矢を射たのか書いていない。また、つなは「矢が当たった」だけではなく、当たった結果「切れた」ことが理由として重要。)

2 (2)で考えたように、男は、嘘をついて実際以上に自分の腕前を高く見せようとしている。そうした見栄を張る気持ちを「虚栄心」という(IIエ)。それぞれの故事成語の意味は次のとおり。ア「推敲」：文章を吟味して練り直すこと。イ「矛盾」：つじつまが合わないこと。ウ「蛇足」：必要な付け加えのこと。エ「五十歩百歩」：大した変わりはないこと。せっかくだらないうた鹿を虚栄心のために逃がした男の行動に合う故事成語を選び。

現代語訳

前の大和の守時賢の墓所は、長谷というところにある。その墓守をする男が、わなをかけて鹿を捕っていたところ、ある日、大きな鹿がかかった。この男が思うことには、「わなにかけて捕まえるのはたやすいことだ。射殺したと言つて、弓が上手であることを人に言いつらそう」と思つて、わなにかかっている鹿に向かって大雁股をつがえて射たところ、その矢は、鹿には当たらないで、わなにかけているつなに当たったので、つなが射切られて、鹿はなんなく走って逃げていった。この男は、頭をかがいて悔しがったが、どうにもならなかった。

古今著聞集：鎌倉時代中期、橘成季によって編纂された説話集。約七二〇話を、神祇・政道忠臣・公事・文学・和歌などに分け、年代順に並べている。「今昔物語集」「宇治拾遺物語」とともに、日本三大説話集とされる。

- (3) 「予期しないことが起こること」という意味の「偶然」の対義語は、必ずそうなること」という意味の「必然」。わざと行う「故意」も対義語になる。
- (4) それぞれの慣用語の意味は次のとおり。ア：「馬が合う」は、気が合う」という意味。イ：「息をのむ」は、驚いて息を止める」という意味。ウ：「二の足を踏む」は、ためらい、しりぞみする」という意味。エ：「板につく」は、経験を積んで、動作や態度が地位や職業にふさわしくなる」という意味。役者や俳優についていう場合には、演技が舞台によく調和していることを表す。オ：「耳を貸す」は、相手の話を聞く」という意味。これらの意味をアオの選択肢に照らし合わせ、適切な使い方をしているものがアであることをつかむ。
- (5) 「たかをくくる」は、大したことはないと思ふ」という意味。「たかをくくってひどい目にあう」のようにつかう。
- (6) ——線の修飾語を各文節の前に入れてみる。自然に意味がつながり、かつ、最も下の位置にある文節が「かつて」の修飾している文節になる。
- (7) 「大きな」は連体詞。形容詞「大きい」とは異なることに注意する。「大きい」は「大きく(ない)」「大きけれ(ば)」などと活用するが、「大きな」は活用しない。ア：「きつと」は、自立語で活用がなく、「降る(だるう)」という用言を修飾しているの、副詞。イ：「穏やかな」は自立語で、「穏やかだろ(う)」「穏やかだつ(た)」「穏やかに(なる)」などと活用する。終止形は「穏やかだ」。状態・性質を表す語で、言い切るとき「だ・です」で終わるので、形容動詞。ウ：「たいした」は、自立語で活用がなく、「度胸」という体言を修飾しているの、連体詞。エ：「小さい」は自立語で、「小さかる(う)」「小さかつ(た)」「小さく(ない)」などと活用する。終止形は「小さい」。状態・性質を表す語で、言い切るとき「い」で終わるので、形容詞。
- (8) ①聞き手である「客」に対して、相手の「食べる」動作を高めるので、「従業員」が自分の「持つ」という動作をへりくだって言うので、「持つ」の謙譲語「お持ちする」を用いる。したがって、正しい組み合わせはエ。